



Title	インタビュー 大阪大学文学研究科 橋本順光教授 : 風刺漫画から見る、メディアとの距離感
Author(s)	橋本, 順光; 齋藤, 雅泰; 吉田, 唯 他
Citation	待兼山文學. 2020, 13, p. 22-53
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/86999
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

大阪大学文学研究科 橋本順光教授

風刺漫画から見る、メディアとの「距離感」

橋本先生は、一八九〇年から一九四〇年まで出版されていた雑誌、*Review of Reviews* に掲載された風刺漫画を集成復刻した *Caricatures and Cartoons* (『万国風刺漫画大全』全十三巻) を編集されています(図1)。今回は、これまでの風刺漫画、そして現代のメディアと風刺漫画の関係についてお話を伺いました。今、メディアに対する私たちの「距離感」とはどのようなものでしょうか。

◆この雑誌が各国の雑誌を作る人の種本になっていて、風刺漫画が使い回されていた。

吉田 まず、風刺漫画を研究されることになった経緯を教えてください。

橋本先生(以下橋本) 結論から言うと、風刺画をやったのは偶然で、英語圏の資料をリプリントして販売するエディション・シナプスという会社があるんだけど、その出版社の方が何か面白い資料はないですかって言っていたので、一八九〇年にイギリスで創刊され

◆フアジズムの時代を再現した世界最大の雑誌・新刊風刺画 3,200 点を収録◆

万国風刺漫画大全 シリーズ全13巻 最新の雑誌

第4期：第二次大戦へ向かう世界
【復刻集成版】全3巻+別冊

Caricatures and Cartoons: A History of the World 1931-1940
編著者・解説者 橋本順光 (大阪大学文学部)
2020年10月27日発行 B5判・総頁1640頁
本誌セット価格 ¥118,000 (＋税) ISBN 978-4-83165-137-4

●19世紀末から1940年までの世界の風刺画コレクションシリーズ。既刊第4期では、第二次世界大戦開始の10年間に対象に、世界35分国で発行された約390紙誌から3,200点以上の風刺漫画を収録。
●主要欧米のメディアからその他諸国でも数多く翻刻されたヒトラー、ムソリーニや、日本の軍国主義、ガンジーとインド独立運動などアジアに関する政治諷刺も満載。
●国際政治問題に加えて、教育やスポーツ、文化・芸術、女性や人権問題など戦前戦中の国際社会のあらゆる側面を映し出した貴重史料集。
●シリーズ全13巻で1890年から半世紀の風刺漫画18,000点以上を収録。

万国風刺漫画大全 シリーズ全13巻

第1期：世紀転換期の世界 全3巻+別冊
Caricatures and Cartoons, 1890-1899: A History of the World
B5判・総頁1,200頁 本誌セット価格 ¥118,000 (＋税) ISBN 978-4-83165-136-0

第2期：戦争の世紀の幕開け 全4巻+別冊
Caricatures and Cartoons: A History of the World 1900-1920
B5判・総頁1,372頁 本誌セット価格 ¥148,000 (＋税) ISBN 978-4-83166-193-2

第3期：戦間期の世界 全3巻+別冊
Caricatures and Cartoons: A History of the World 1921-1930
B5判・総頁1,629頁 本誌セット価格 ¥119,000 (＋税) ISBN 978-4-83166-194-9
(Editor's Synopse)



図1



図 2

た *Review of Reviews* を提案しました。

十九世紀後半って言ったらシャーロック・ホームズがいい例ですけど、雑誌がたくさん出たんですね。今で言う総合雑誌が生まれたのが一八八〇年代、九〇年代なんです。大雑把に言って、一八七〇年から教育法が何度か改正されて識字率が上がったおかげで一八九

〇年代には読者層が急に分厚くなった。日本の明治時代と一緒に。膨大な雑誌が出版されるようになったので、十九世紀の段階でもう、当時の人には全体像が見えないくらいでした。それで各雑誌を簡単に要約して、読みどころを紹介する月刊誌ができたんです。だから *Review of Reviews* というのは「雑

誌の雑誌」という意味です。先月の雑誌にこういうおもしろい記事が出てますよというのが挿絵入りで掲載されている。その中で特に人気になったのが、先月に出た風刺画をよりぬきしたコーナーです。しかも、イギリスだけでなく、世界各国の各雑誌の漫画を集めて編集している。フランス、ドイツ、アメリカとかだけでなく、日本の雑誌の風刺画まで幅広く載せて、何が起きたか、その国ではどう捉えられているかが手に取るようにわかる(図2)。十九世紀後半に出版された当初は、印刷技術に限界があって、風刺漫画はそんなにたくさんないんですけど、どんどん増えていつてこの雑誌の目玉コーナーみたいになった。

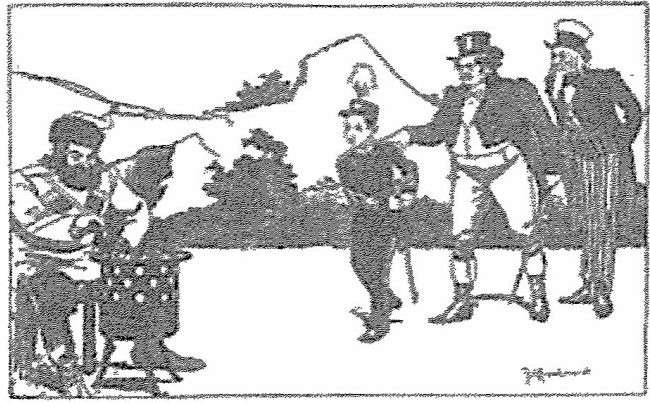


图 3

それが非常におもしろくて見ていた
ら、日本の有名な「火中の栗を拾う」
っていう漫画（図3）が載っていた。
教科書に必ずあるでしょ。栗を拾えつ
てイギリスにそそのかされて、ロシア
が焼いている栗を拾いに行こうとする
小さな日本兵が描かれた風刺漫画。日
英同盟で勢いづいた日本が、日本とロ

シアとの対立を激化させ、利害が一致する英米は傍観して黙認するという国際情勢を絵解きしている。この漫画が最初、アムステルダム の雑誌に載っていたことはわかっていたんですが、なぜ日本に入ってきたのかよくわからなかった。それがこの *Review of Reviews* から入手したらしいことがわかってきた。それぐらいこの雑誌は、当時の日本じゃ雑誌を作る人の種本になっていた。日本だけでなく、ドイツ、フランス、イギリスの漫画家もこれを見ていて、パクったり、パクられたりしている(図4)。そんな使い回しや転用がわかるから復刻したら売れるんじゃないかと思って出版社の人に言ったら、おもしろいですね、やりましょうとなりました。その本の解説を書いているうちに調べていたら、どんどんおもしろくな

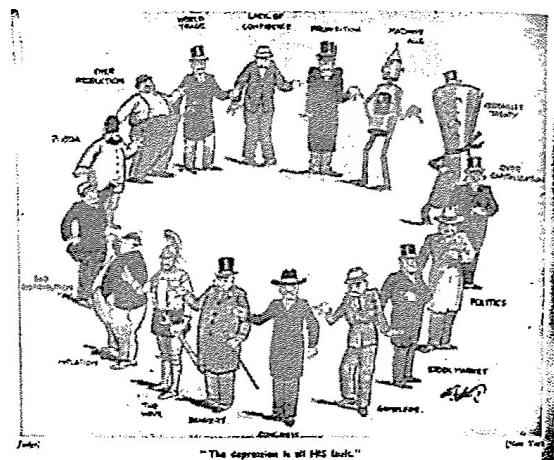
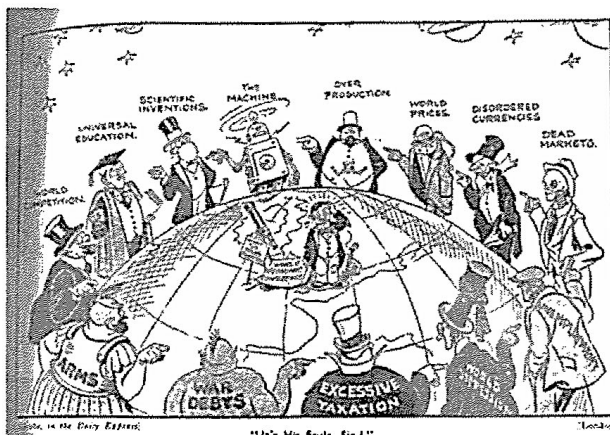


图 4

って、じゃあ次も次もとなって、そのまま続けて編集して解説を書いていった。本業じゃないんだけど、ついおもしろくて *Review of the Reviews* の最終巻までやっちゃったわけですね。

吉田 「火中の栗を拾う」がそれまで *Review of Reviews* からの転載だとは全く知られていなかったということですか。

橋本 そのはずです。日本での初出は明治時代の『中央新聞』という新聞なんです。その『中央新聞』が、日本に「火中の栗」を広めたのは知られていました。その『中央新聞』の記事にはちゃんとアムステルダム誌より、と書いてある(図5)。わかりやすく「日」「英」とか書き込んであるんだけど、じゃあ元はどこから来たのかなんて誰も調べなかった。それが、偶然、*Review*

of Reviews を見たら、描いたのはブラケンシークという人気漫画家ということがわかった。しかも、当時『中央新聞』の編集部にいた水田南陽は、一九世紀末に長く渡欧していて、その時のことを書いた『大英国漫遊実記』(一九〇〇)をみると、*Review of Reviews* の編集室に行つてステッドに取材している。それでだいたいの経路がわかった。ちなみに水田は、この英国滞在時にシャーロック・ホームズにほれ込んで、ホームズを最初に翻訳した一人になります。

◆ 英語によるプラットフォームをつくれるはずだと思っていた。

齋藤 *Review of Reviews* についての解説を読ませていただいて疑問に思った

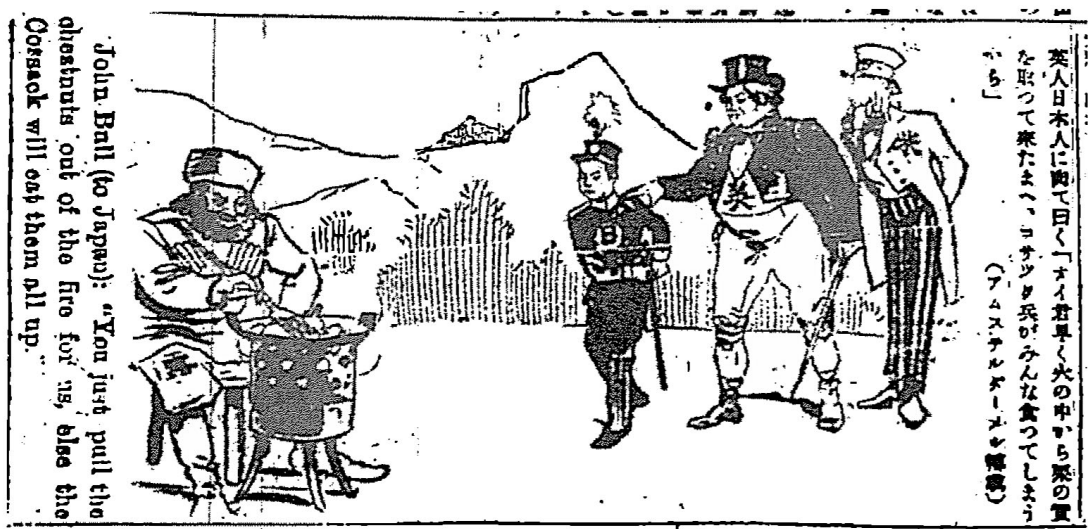


図 5

ことがあります。*Review of Reviews* は雑誌のまとめ本のような形で基本的に

は無党派で中立ですけど、中心人物のステッドはかなり政治的活動に参加しているから、どのように中立性を担保していたのが気になりました。

橋本 ステッド自身は中立を装ってはいけれど、実際には政治的な人で、平和運動に非常に関わった。あとオカルティストだった。ちょっと相反するようには聞こえるけど彼の中ではおそらく同じことで、魂はみんな平等ということですね。十九世紀のスピリチュアリズムは、今の言葉でいうとマイノリティフレンドリーなんです。死んだら魂はみんな一緒に輪廻転生する。つまり魂に人種や男女の区別はないってこと。これは当時としてはかなりリベラルな考え方だったんです。ステッドは死者とコンタクトをとることにすごく熱心で、その延長で、反戦運動や反帝国主

義運動に入れ込んでいます。みなさんが教科書で習ったであろうハーグ密使事件を大きく取り上げたのはステッドで、彼が代表権のない当時の朝鮮半島の三人の使節にインタビューをして詳しく記事を書いた。それがハーグ密使事件が知られるようになったきっかけなんです。さらに、彼は親ロシア派だったから日露戦争には批判的だった。自分の党派性はあったんだけど、当時の雑誌とか新聞はもっと党派性が強かったんですよ。十九世紀の半ばか後半くらいに色分けされて、もう支持政党まで決まっていることが多い。だからその中ではステッドははるかに中立的だった。

齋藤 時代の中で相対的に中立だったと言えるということですね。

橋本 それと、異論も載せたというの

はすごく珍しいです。自分の立場と反対の意見も紹介したり、お互いに対立する風刺画も載せたりした。これは日本のジャーナリズムでよく言われる両論併記、公正中立性とちょっと似ている。でもこれは、そうやって対立を煽る方が売れるからということも否めない。また、ステッド自身は、こういうプラットフォームを作ることでも世の中が良くなると信じていた。彼は今でいう英語中心主義者だから、英語を話す人が増えて世界中の人が英語のものを読み書きして、英語がプラットフォームになれば世界が良くなると信じていた。だから彼は病的とまでは言わないけれども、異様なまでの情熱をかけて雑誌を作っていた。この雑誌はのちの *Reader's Digest* (*1) のもとになっている。今だとツイッターのまとめサイ

トに近いかな。だから中立といっても、全然中立じゃないでしょ。

齋藤 選んでいるっていうこと自体が。

橋本 そうそう。自分は一応中立です、と言いながら、でも明らかに傾向を持つてまとめているでしょ。ツイッターと同じです。だから中立性と公平性はある程度妥協できる。今と非常に通じるところがある。

齋藤 ステッドは英語中心主義と同時にエスペランティストでもあったというのはちよつと不思議な感じがしています。

橋本 あれはちよつと冥界の言葉と関係があつて。エスペランティストとかエスペラント語っていうとすぐユーロピア主義的なものを私たちは感じるでしょ。

齋藤 当時文学者の間ではやりました

よね。

橋本 そうそう。スピリチュアリストも同じような考え方をしていた。だつておかしいでしょ。イタコとかでもないじゃない、なんでみんな東北弁なんだつて。あれと一緒に。だから冥界にも共通の言語があつて、それがたまたま、霊媒それぞれの言葉を通じて話しているんだつて言われる。

齋藤 エスペラントはシンプルな、人言言語という特徴を持っているので、道具のような印象を持っているのですが、スピリチュアリズムはそもそも言語を道具としてみていないというのが新鮮に感じました。

橋本 そうね、やはりエスペラントがあそこまでブームになったのは、ナシヨナリズムや植民地主義に対する危機感をみんな持っていたからでしょうね。

どの国の言葉を使うかで、上下関係や勢力地図が力をもってしまうから、国連のような理念や場を作ろうというのが、だいたい十九世紀の後半くらいにできるんです。

齋藤 一時期、国際連盟の公用語になりそうでしたからね。

橋本 そうそう。言葉Ⅱ民族が対立を生んでいるから共通言語を作ろうとした。そういうときにステッドは、英語がとりあえず今のところ一番うまくいくから英語でいいんじゃないかって立場。英語をとにかく広めればいい。そういう考え方の人は今でもいるでしょ。

齋藤 無自覚な文化帝国主義みたいなものですよね。

橋本 もちろん文化帝国主義です。英語を広めれば、すべてうまくいくなんてことは決してないんだけど、十九世

紀はまだそういう幻想があつて、イギ

リスが生んだ民主主義と自由経済は、英語によつてプラットフォームが作れるはずだ、みたいな。実際ステッドが始めた *Review of Reviews* にすぐ姉妹編のようなものができるんですね。

American Review of Reviews とか *Australian Review of Reviews* とか。実は日本の『太陽』(*2)という雑誌も *Review of Reviews* を大いに参考にしてた。『太陽』って聞いたことある？

齋藤 『太陽』？

橋本 『太陽』っていう明治時代の総合雑誌があるんですよ。今でいう『文藝春秋』や『中央公論』みたいなものです。『中央公論』のもとになった『新公論』(*3)っていう雑誌があるんですけど、あれも *Review of Reviews* をまねしている。英語タイトルに *Tokyo's*

Review of Reviews ってつけてたくらいで、そのせいかどうか、*Review of Reviews* からの風刺漫画を無断でたくさん掲載していた。あと『文藝春秋』も『中央公論』も一応、党派性がないことになっているでしょ。読んでいた人なんとなく全体が見えるかのような錯覚が得られるというか、そういう目配りの良さで勝負をしている雑誌ですよ。 *Review of Reviews* はこういう総合誌のもとになった。

◆概念の擬人化に二十一世紀の私たちは極めて警戒的だが十九世紀までには必要な作業だった。

吉田 *Review of Reviews* が色々な記事を要約していった中で、今振り返ると何か抜けていたものがあると解説で書

かれていましたが、何が抜けていると思われたのでしょうか。

橋本 やっぱり十九世紀だと今で言うマイノリティ、労働者と女性、子どもですよね。それに広い意味での移民。このあたりは、もう完全に抜けている。国を一人の一般人で表現することに全く疑問がなかったんですよ。国を一つの性別で誇張した容姿の人で代表させる、そういう発想は、今、ないでしょう。それをするとなら PC (Political Correctness) 的にアウトだし。皆さんは知らないかもしれないけど、『サイボーグ009』という石ノ森章太郎の人気漫画があった(図6)。あれは簡単に言うと日本を中心にした多国籍軍なんです。日本の男の子がリーダーで、フランスの女の子、中国の男、ネイティブアメリカンの男、イギリスの



図 6

男と、サイボーグが九人いる。それがまあ全部ステレオタイプなんです。フランスの女の子は、いわゆる「紅一点」でおしゃれなマドンナ、中国の人はいつも料理してて火を噴いている。ネイティブアメリカンの男は片言しか話さない大男。どれもだめでしょ。一つの国を一人に代表させる場合、あったとしてもあくまで政治家なんです。首相とか大統領とか、特定の人で表わしている。いわゆる日本人ってこうだよねっていう感じで描くのはほぼない。

アメリカについてもトランプは描くけれども、昔のようにアンクル・サムなんていう、星条旗の帽子かぶった背が高く、顎髭を生やした人物はまず出てこない。イギリスだったらジョン・ブルという、小太りの帽子をかぶった男がイギリスの代表だった。火中の栗の風刺画には、アンクル・サムとジョン・ブルの両方が出ていて、ロシアはコサック兵で、日本は小柄な兵隊として描かれている。こんなふうに擬人化がなんの疑問もなく用いられたのは、十九世紀から二〇世紀ぐらいまででしょうね。ある国を男性として表したり、ある概念を女性として表したりすることが、差別や偏見を助長するという発想がほとんどない。そういう問題は、例えば、目隠しをした女の人が天秤と剣を手に入っている像。

鷹取 裁判所にある天秤を持った人ですね。

橋本 そうそう、あれは正義の擬人化。今、擬人化って評判が悪いでしょう。ある種のキャラクターなりキャンペーンのためになんで一定の性別の一定の体型の人ばかり選ばれるんだっていう意見が必ず出てくる。

一同 ああ。

橋本 町なり観光なりアピールしたいものをどのように擬人化するかですよね。その時、一定層の男の人に強く訴えるものばかりが選択的に選ばれる。それで揉めるでしょう。その手法は、風刺画が広めたといっている。齋藤 偶像化とかモチーフ化とかそういうものですか。

橋本 そうそう、そんな比喻ですよ。国を含む概念の擬人化に私たちは極め

て警戒的で、容易に偏見を助長するっていうのが二十一世紀の常識ですけど、十九世紀まではわかりやすく説明するために必要な作業だった。

齋藤 簡単に理解したかったんですよね。

橋本 有名な例だと七月革命を率いる女性。女の人が三色旗を持っていて、銃を持った男たちがおおーって言うてる有名な絵があるでしょ（図7『民衆を導く自由の女神』）。なぜあの女の人には胸をはだけてるのってよく言いますよね。あれは、そうすることで、あの人は裸体を恥ずかしがらない、つまり、人間ではなくて、真理や正義を体現しているっていう神話的な意味を持つわけですよ。だから古典古代の美を体現する形で描かれている。一方、付き従う男は、革命に参加した一般人



図7

として、歴史的に正確に描かれている。今はこういう表現はだめですよ。真理や正義を、なぜ一定の民族の一定の体形の女性が代表する必要があるのか、できるのかって、必ず言われるでしょ。だから革命の絵と同じように、地震とか大惨事が起きた時、どの人を被害者

として描くか神経を使いますよね。子供が泣いているところを撮るか、男が落ち込んでいるところを撮るか、老人に注目するか、外国人に注目するか。それでまるきり印象が変わってくる。それを今じゃメディアの方も考えて、慎重に写真を切りとって載せている。だからアフリカの貧困を訴える写真とかは、誰が紛争とか格差の問題を引き起こしているのかが問題になってくると面倒だから、いちようにギロツと目を開いた子供ばかりが出てきますよね。齋藤 そうですね。色んなアフリカ系の、色んな人がいる中で選んでいる。金子 アムリットサル事件の風刺画の意味がちよっとよく分からなくて教えていただきたいです。（図8）

橋本 あれも誰を被害者として描くのかがどれだけ重要かよくわかる例です

ね。一九一九年のアムリットサル事件では、イギリスの支配に抗議したインドの人々が虐殺されたんですが、植民地のインドと本国のイギリスでは反応がけっこう違ったんです。現場の方はこれでインドの独立運動を一挙に征圧できると強気だったんですけど、イギリスでは、武器を持たない民衆を虐殺したとして非常に問題になって。それ

で実態を調査したのがハンター報告書。このハンター報告が薬として描かれていて、インドの女性がそれを傷口に塗っている。つまり、反英運動が起きて怪我したけれど、それはハンター報告書を読むと治る。報告書を読めば、そんなにひどい事件ではなかったことが分かるという風な意味ですよ。でも実際にはハンター報告によってむしろ

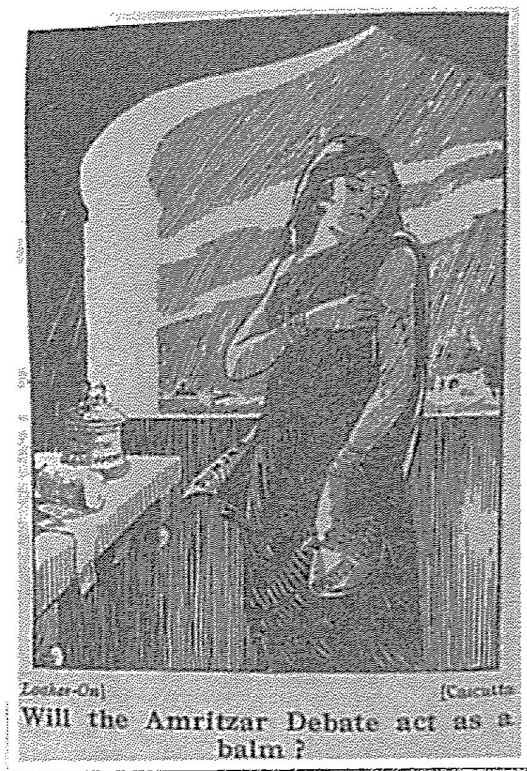


図 8

反英感情が広がったので、これは薬どころか、毒だった。これで怪我がひどくなったと取ると、全然別の意味になるでしょ。だからこの風刺画はイギリスの強圧的なインド支配を肯定しているんだろうけど、今の私たちが見るとむしろ逆にみえる。ハンター報告を塗るとかえってひどくなりますよと私たちは思っちゃうから。これは作り手の意図とは全然別に読まれちゃう一例。

齋藤 これが女性なのはなぜでしょうか？ 植民地は女ということですか？ 橋本 基本的に植民地の人は女性ですね。この風刺画でもインドの人々を家にいる女性として描いている。だから、まるで余計なこととして不注意で怪我でもしたかのような印象を与えるでしょ。家のことだけしていればいいのに、分をこえて口出しするからヤケドしたみ

たいな。

齋藤 満州映画とかも一緒ですね。

橋本 全く一緒。李香蘭みたいに、必ず女性として描かれる。支配する日本人の方は男性。和製ポカホンタスだからね。そういう奉仕する植民地が女性として描かれるのは、さっきの正しいかどうかを審判する正義＝女性なのと、実は根っこはおんなじ。「男」に正しいことを保証し、その「男」に奉仕するから。そもそも映画だと、コロンビアという映画製作会社の映画ってオープンングにたいまつを持つ女性が出てくるでしょ。これは映画が今みたいに高尚なものと思われていなかった時に、映画は文明を照らす光という意味でたいまつを持ってる。これはアカデミー賞も同じで、別に学術でもなんでもないのでアカデミーって言うでしょ。ヨ

ーロッパとかの芸術院みたいな権威付けをするためで。

鷹取 風刺画で女性が揶揄されていたのは、やっぱり風刺画を見るのが男性中心だったからでしょうか。

橋本 まずそうでしょうね。少なくとも風刺画の中で女性はステレオタイプばかり。一九二〇、三〇年代になると女性の社会進出が進むから、働く女性をあざ笑う風刺画がたくさん出てくる。あと恐妻家もの、いわゆる蚤の夫婦的なものもあの頃に出るんですね。チヨウチンアンコウみたいに女性が大きく描かれて旦那の方はものすごく小さい。それで女性がガミガミって、男が縮み上がるみたいのが出てくる。女性の社会進出と権利の主張を嘲笑する漫画がどつと描かれるのが一九二〇、三〇年代。

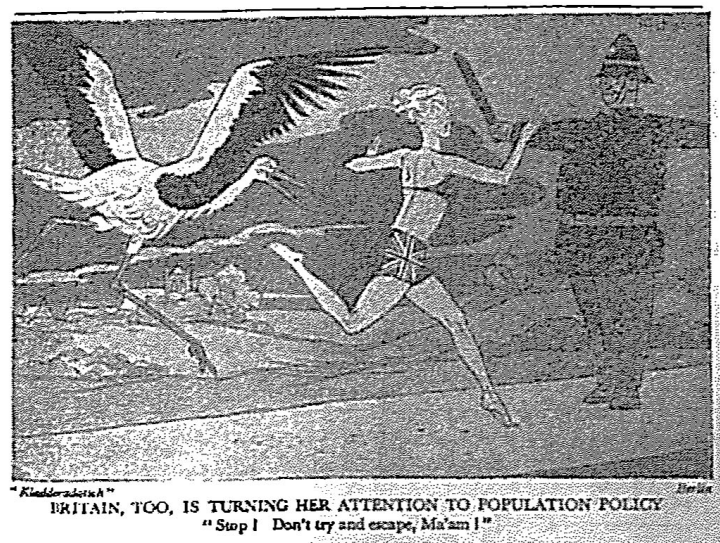


図 9

それが戦争が近づくとも良妻賢母を推奨するのが増えてくる。たとえば一九三八年、イギリスとの開戦前夜のドイツの政府寄りの雑誌で、イギリスがついに人口問題に注目するようになったという内容の漫画(図9)。イギリス国旗の柄のビキニを着たブロンドの髪の

短い女性が、コウノトリに追いかけて走っているところを、警官が「止まりなさい。もう逃げちゃダメですよ」と言っている。モダンな女性に子どもを産むことから逃げて遊んでちゃ、もしくは働いてちゃダメですよ、これからは子どもを産みなさいっていう意味。重要なのは、この漫画がすでにそういうキャンペーンを張っていたドイツで出たこと。ナチスの優生学的な政策は聞いたことあるでしょう。健康なアーリア人種の子をたくさん産みなさい、そうでない子どもは殺しなさいといって、障害者とか同性愛者たちがたくさん殺されて、その延長にユダヤ人を絶滅させようとアウシュビッツができたっていうのは聞いたことがあると思います。今、そういう風にした方がいいんじゃないかって平気で言う人がいる

でしょ。でも、「健康」の線引きは簡単にできないし、いつだって誰だって「劣っている」状態になりうるっていうのは分かりきったことですよね。この漫画で興味深いのは、今さらながらイギリスがドイツみたいなことをしだしたと指摘していること。つまり、イギリスは本気でドイツとの戦争を考え出したっていう、ドイツ国民への引き締めであると同時に、ドイツはもう前からやってるから大丈夫ですよねっていう戦意高揚のプロパガンダなんです。今と一緒にでしょ。女の人が生意気になったからとか、社会進出するから子供が減ってるんだっていうことを平然と言う人がいるけれど、そのほぼ原形が戦争前夜に出ている。

◆メディアに書かれる内容よりもそれによって何を言いたいのかに私たちは関心を持つ。

橋本 *American Review of Reviews* と *The Strand Magazine* (*4) はインターネットでほぼ全部見れるから是非ご覧ください。 *The Strand Magazine* はシャーロック・ホームズが連載された雑誌で一八九一年に創刊されました。あれを見たら今の雑誌がどうやって生まれたかがよくわかります。ばらばらな話題の記事が、写真と挿絵をいっぱいにして並んでどこからどう読んでもいい。識字率が上がって印刷技術が進歩して中産階級が出てきて、政治問題を長文で論じる挿絵なしのそれまでの雑誌とは全然違う。政治よりは面白い雑学を共有する方がいいという、私

たちのような中産階級が生まれたのと一八九〇年代の雑誌はぴったり一致する。だから、いろんなデータベースや雑学を駆使するホームズは、まさにそんな情報満載の雑誌に連載されたわけだ。ホームズのように、情報を総覧するとか、大きく雑誌や新聞の傾向を見たいって思ったんですよね。

齋藤 時代に応えたということでしょうか。

橋本 そうそう、今で言うまとめサイトですよね。「NAVERまとめ」だったわけ。Togetherとかってツイッターでも必ずあるでしょう。あれと全く一緒。いちいち付き合いたくないけれども、大体どんなことがあるかは知っておきたい、というのはみんな持つてるでしょう。ネタバレサイトとかね。おんなじことが印刷物が爆発的に増えた十九

世紀に起きた。だから風刺漫画ができたわけ。社会問題や国際関係とかね、ぱっと見て分かるでしょう。それでお互いにネガティブキャンペーンをやるから、みんなこぞって新聞雑誌を買った。

齋藤 中間層が出現して、中間層が風刺画を欲しがる人たちだとするならば、現代ってマジョリティーがないとか分裂してるとか言われていると思います。そういった状況で風刺画というのはどういう風に変化したのか、そもそも現代に生きているのでしょうか。

橋本 特に現代の日本では、この頃のような影響力のある風刺画はほとんどないです。今じゃ、ツイッターがそういう役割なんじゃない？ 社会状況なり国際情勢というのを百十字で極論することで分かったような気にさせて

くれるでしょう。あれを見ているとなんとなく分かった気になる。そのためにだけに存在してると言ってもいい。風刺画みたいなのはむしろツイッターで分析するネタになってしまった。これって要はこういう意図があるんだよね、とか宣伝が見え見えだとか。

齋藤 風刺画の政治性とかを追求したくなってしまうということですか？

橋本 そう。一回転したっていう感じ。風刺画とかに対して、私たちは良くも悪くもメディアリテラシーを身につけたというか、メディアに書かれている内容そのものよりも、それによって彼らが何を言いたいのかの方に興味を持つでしょう。要はお前それでマウンティングしたいだけじゃん、とか。それって要は自慢だよなとか。全てをそういう「本音」に換言することが分析す

ることだと思うようになった。実際、そうすると全て分かった気になっちゃいますよね。ある種、悪しきフロイト主義に毒されてると言えるかもしれない。つまり、本音ではこういうことをしたいのに、その代償として何かを書いている、作っているという風に見てしまう。そのもの自体を見ることよりも、それによってこの人は何を言おうとしているか、それによって私は何を言えいいのかばかり考える。

齋藤 見る態度が変わったということですね。これはやはり風刺画ができてから時間が経ったからなのでしょう。橋本 そうそう。もの自体をそのまま受け取るのではない。それこそ一九九〇年代ぐらいから私たちはものに対する見方ががらっと変わった。これは批評理論では言語論的転回とか作者の死

とか色んな言い方をするけど、書かれたものというのは書いた人の無意識な欲望が出ていて、だから書かれたものは書いた人の意図とは別に、受け手が自由に解釈できる。こうした受け手優位が今の常識になっていくでしょう。この考え方はもともと一九六〇年代ぐらいに現代思想とか批評理論から広まったんですね。構造主義とかがそうですけど、私たちは自分の意志で発言しているのではなく、組み込まれた言語や社会の構造という限界のなかで発言させられていると考える。ポジショニングがまさにこれ。ポジショントークというのは、構造主義を意識した開き直りでしょ。どうせ発言が立場によって規定されているっていうなら、そしてそういういわれるなら、すべてがポジショントークになってしまう。

齋藤 話す内容じゃなくて話す立場に目が向けられるということですか？

橋本 そうそう。「あ、お前はその立場ね、わかるよお疲れ」。そういう風に見てしまう。

齋藤 それが今のツイッターの雰囲気なんですね。

橋本 それはそれで楽しいわけ。書かれたもの自体を細かく見ることなく、「その人はこれによって何を言おうとしているか」のみに注目する。だから百四十字でいいんですよ。逆にこの仕組みだと、どうしてもそうなる。だから自分からは何もしないで、相手にからむのが一番強いんですよ。

齋藤 そうですね。さぐられることがないから。

橋本 風刺画がなにかをプロパガンダするとき、省略や誇張がそこに隠され

ているというのが自明になった。つまり、何かが書かれる時は必ず何かが書かれていない。例えば政府の広報漫画を見たとき私たちはすぐ、ここで何が書かれていないか、これによって何を隠そうとしているかという方を考えるでしょう。書いている人と書かれている相手の文脈を考えないと読めない。

構造主義の弊害とは言わないけれど、ポスト構造主義の典型的な見方ですよね。皮肉なことに、そんな広報でおなじみの嘘くさい図をポンチ絵というんですよ。これは官公庁でキャンペーンとか法案を作る時に、その概念図や仕組みを描いたもののこと。

齋藤 パワーポイントみたいなものですね。

橋本 そうパワーポイントにでてくる、なんだかわかったような気にさせる図。

あれなんでポンチ絵っていうかという
と、『パンチ』（*5）っていうイギリス
の風刺漫画の雑誌に由来している。一
八四一年に創刊されて、世界中でまね
されたおかげで、パンチといえば風刺
画の代名詞にまでなった。それで明治
の日本でも落書きみたいな漫画をポン
チ絵って言うようになって、さらに官
公庁とかでこれで事態は好循環するつ
て無理やりまとめた絵をポンチ絵とふ
ざけて言うようになった。現に、今の
私たちはポンチ絵を素直に見ないでし
よ。風刺画みたいに、何かが隠されて
るんじゃないかって疑う。その点でま
さに現代の風刺画。

齋藤 とすると、ステッドが目指した
「公平に中立なもの」はもう存在しな
いってことなんですか。

橋本 まあ、そうですね。だから好き

にしているとか開き直るのが常態になっ
てしまっている。でも仕組みは十九世
紀とそんなに変わらない。結局ツイッ
ターとかプラットフォームとなるネッ
ト業界が儲かっているのは、印刷業界
が儲かっていたのと同じ。英語圏を中
心にしてプラットフォームを作ったも
の勝ちだっていうのは全く変わってな
い。ただそれが意識されるかどうかは
別の話だけど。今のいわゆる「情報化
社会」って、ディストピアというかユ
ートピアですよ。みんながプラット
フォームを共有できていると錯覚する
ことで、どれだけ分断していても、み
んなの仲が陰悪でも、たとえイライラ
ばっかりしててもとにかく退屈はしな
い。こつこつ書いたり、じっくり読む
ことより、手軽にマウントや共感を手
にする場があると、そりゃ本は読まな

くなるよなあ。

齋藤 情報を追えている気がしちやいますからね。

橋本 コンテンツつていやな表現があるけど、風刺画だけじゃなく、本も映画もみんなコミュニケーションのための埋め草というかツールになっちゃった。まとめサイトみたらわかった気になるし、それでガヤガヤする方が楽しいって感じでしょね。

◆ ちょっと変えたら正反対の立場でも使えちゃうところが風刺漫画の面白くて怖いところ。

齋藤 今はどういったものを風刺画は題材にしていると思いますか？ 単純化してステレオタイプ化することを拒否するのが現代。一方で、現代でも一

枚で分かりやすく知りたい理解したいという欲望はあるなら、風刺画の題材は政治家以外にもあるのでしょいか？

橋本 政治家は一番やりやすいですけど、どこに注目するかというのは変わった。今じゃ、政治家を描く時に、女が「男の園」の秩序を乱したなんて絶対描かないし、身体的な特徴とか誇張するにしても偏見を助長しないようにする。障碍とか病気とかどうしようもないものはまず取り上げない。

でも、効果的に問題や構図をわかりやすく切り取って印象付けるという風刺画が発達させた手法は、今もよく使われている。十九世紀だと、異分子を招かざる客として強調したように、今ではダイバーシティーを強調する技術が発達しているでしょう。皆さんなら、あのオープンキャンパスの嘘くさい写

真を見たらわかるはず。私たちはジェンダーフリーでエスニシティとか差別とかにとらわれず、こんなに開放的なキャンパスですよというメッセージ。いまじゃ多くの大学のセキュリティが厳しくなって、ふらっと研究室を訪ねるなんてできなくなったから、そのぶん開放日を設けただけで。基地とかと一緒に、地域の住民や高校生に親近感をもってもらわなくちゃならないから。

齋藤 十分機能していますね。

橋本 伝えるべきメッセージが変わっただけで方法自体は実は変わっていないですね。今広告を作っている人はそういうのを計算し尽くして作ってんじゃないかな。十何秒しかないCMや、一枚のポスターでも、今はネットだといつまでも残るし、拡散しちゃうから神経使ってるでしょ。

齋藤 現代の風刺画は、シャルリーエ

ブド事件とかバンクシーが印象的です。アベノマスクとかはツイッター上で風刺画として描かれてそれ自体に賛否両論の騒動があったりしましたが、そういった事件についてどういう風に思いますか？

橋本 新聞や雑誌が主な発表の場合だった風刺画は、今じゃ姿を変えて生きていると思いますね。アベノマスクはその一例でしょう。誰が言い出したのか気にしないままに、あつというまに政権を要約するスローガンとして広まったのは、日本の落首（らくしゅ）や落書（らくしょ）とよく似てる。アベノミクスからアベノマスクへというところ、後世の教科書に写真が載って、受験生がみんな語呂合わせで覚えるみたいない事な出来。

ただ風刺画の場合、政権に批判的か

同調的かという内容より、広報というか広告の手法が重要だと思うんですね。広告は国の宣伝であるプロパガンダと関わりが深く、電通が元は満洲で広報と情報の会社だったことはよく知られていると思います。こうしたつながりは日本に限った話ではなくて。有名な例だと、ドイツのレニ・リーフェンシュタール（*6）という女性の監督がいるんですね。この人はプロパガンダの話の時によく議論されるけど、彼女が一九三四年にナチスの党大会を撮影した『意志の勝利』と、一九三六年のベルリンオリンピックを撮った『オリンピック』は、その後のあらゆる広告やポスターの原点になっているんです。『オリンピック』は演出や再現映像もいわず、スポーツ選手をどう撮ったら

一番絵になるかという原型を作った。

ナチスの党大会も今見ると別に大したことないけど、それはあれから洗練されたからであって、手法は今のコンサートライティングと同じ、ジャニーズの嵐とかの。

齋藤 演出みたいな。

橋本 そうそう、嵐でおなじみの音と光の使い方はあの頃に原型ができあがる。彼らの登場の仕方って、軍服っぽい恰好で音にあわせてじゃーんと出てきてサーチライトみたいなのがパッと当たりますよね。あれはロックとかポピュラー音楽のコンサートとかにそのまま使われた。二十世紀フォックスの映画だと、パンパカパーンっていう冒頭のファンファーレで、20って書いた巨大な彫刻にサーチライトが当たるでしょ。あれは一九三五年から始ま

つて、『意志の勝利』の影響かどうかはともかく、ああした敵襲を思わせる映像が、立場が正反対の映画会社の娯楽でもとても好まれた。

齋藤 一般的なメディアからプロパガンダだった訳じゃなくて、プロパガンダからいわゆる一般的なメディアに導入されたんですね。

橋本 それは作り手がほぼ一緒だから。プロパガンダ映画を作る人が、戦争が終わったりした後、娯楽映画を作るし、あるいは逆に娯楽を作ってプロパガンダに行くから、そりゃ同じになる。円谷英二とか東宝がいい例ですよ。東宝って戦時中は、軍の全面協力で国策映画をたくさん作ってたから、その縁で今も自衛隊が協力した映画をよく撮ってる。円谷はゴジラとか特撮映画の神様として聞いたことがあると思うけ

ど、彼がそういう特撮で最初に才能を発揮したのは、真珠湾攻撃を扱った『ハワイ・マレー沖海戦』(*7)です。アメリカの観客がなんでこんな映像が残ってるんだって勘違いした伝説があるくらい。の迫真の出来。その円谷が戦後、空襲そっくりのゴジラの攻撃に苦しむ東京を特撮で描いた。ゴジラシリーズを見ると、戦争映画の時の技術がそのまま使われていることがわかる。作り手が同じだからそれは当然のこと。作り手はその時に受ける形でつくっただけともいえる。

漫画も同じで、戦時中は戦争協力の漫画を書いていたのに、戦争が終わった途端にアメリカ万歳、民主主義万歳の漫画を描いている。だって描き手がないから。医学者の戦争協力とかとちよつと似てるかもしれない。結局、

その手の専門家のデータや技術はみんな欲しかったりする。

齋藤 それは時代性があるので、当時の書き手にもそういうところの出身だ、という意識があると思うんですけど、現在の書き手は自分の政治的なものには無意識で書いているかもしれないと思います。その場合だとやっぱり違いますよね。

橋本 それこそ朝ドラの『エール』の登場人物のモデルになった古関裕而(*8)という作曲家は、戦前は軍歌をたくさん作って、戦後は応援歌を作ってる。応援歌って軍歌と一緒にゃん。ただ上手いからずっと使われる。あの人が巨人と阪神の両方の応援歌を作っているのは有名な話。イデオロギーとか考えず、その時に受けるものにベストを尽くす。だからこそ作家や作り手

THE SHIN-KORON
Vol. XIX, No. 7. AUGUST 15, 1904.

新公論

第九十號
第七號

黃人福論 ● 活紀念碑 ● 日本人
 の容貌 牀格 ● 平和の戦 (山本)
 雜録 人シ
 氏の日本
 人特性
 斯波貞 ● 小
 吉氏譯 ● 島
 氏の水
 氏の外
 の見た
 含漢 支及
 邦の風
 俗談 見る
 時局雜感 萬島
 夢實例 (正五郎) ● 井 ● 薩馬教と日本宗教 ● 眞

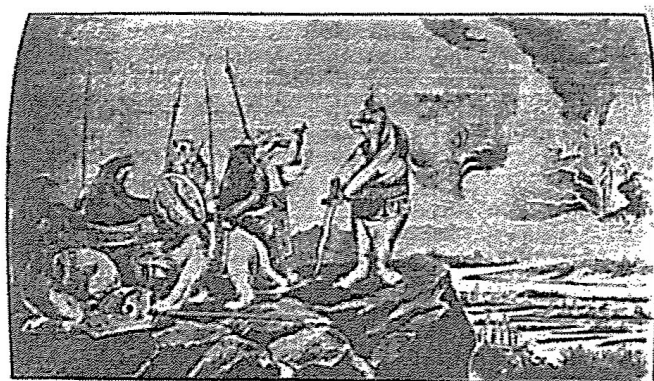


獨帝親黃人福の圖
 People of Europe! defend your most holy treasure.
 日清戦役
 當時の
 皇朝が
 自らに
 加へし
 天竺に
 向て遠
 洲各國
 雲間を
 はるる
 像の如
 洋國の
 黄禍を
 示し給
 する也



(明治廿九年創刊)
Tokyo, Japan

図 10



黄人福の圖
 Yellow Menace.
 People of Europe! destroy your most polluted refuse.
 (with apologies to H. I. M. the Kaiser.)

(By our own Cartoonist)

図 11

の戦争責任はすぐ難しい問題。どこまで信じていたのかはなかなかわからないし、軍事技術と民間への応用という関係と似てる。

齋藤 今と同じようにそれで食べていた訳ですからね。

橋本 そう。でも、だからといって免

罪できるかという、そんな単純な話じゃない。かと言って、それはけしからんと言うだけでも片付かない。ちょっと変えたら、戦後も使えちゃうわけですから。それが風刺漫画の面白く、かつ怖いところだと思います。立場が違ってもちよこつと変えたら、そのま

ま敵の方にも使えちゃう。

齋藤 確かに黄禍論と黄禍論の風刺画がすごく面白かったです。

橋本 そうですね、Review of Reviews に載っていた、東洋人が攻めてくるっていうドイツの黄禍論を描いた風刺画(図10)が『新公論』の表紙になったん



図 12

だけど、その風刺画への反論として同書内に掲載された漫画(図11)では、白熊たちのロシアという悪の帝国は恐れをなしていて、むしろ黄色人種は幸福をもたらすのだという風に、意味をくると反転させている。あと傑作は、中国の側から、戦艦で攻めてくる欧米

の脅威を描いた風刺画(図12)。これを描いたのは、例の「火中の栗」を描いたオランダのブランケンシークです。こういった風刺画の仕組みに興味を持ったきっかけがあつて、言おうかどうか迷ってたんですけど、それが相原コージと竹熊健太郎の『サルでも描けるまんが教室』(図13)。一九九〇年代初めに出了た小学生向けの漫画入門のパロディ。ジャンル別に漫画はこういうパターンがあるので、こうした戦略が可能みたいなのが書かれてる。その中で、受けるPR漫画の描き方というものがあった。下品で申し訳ないんだけど、出ている例が包茎手術推進法案のPR漫画を描くとしたら、というものの。包茎手術をした方が良いという政策が決まったら、どういう漫画を描けばいいのか、竹熊健太郎という編集者

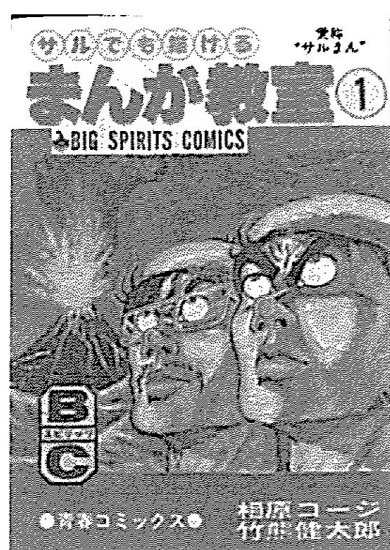


図 13

が相原コージという漫画家に指南してこういうのを描けばいいという例が挙がっている。すごいのは、そのあと必ず法案反対グループができるから、今度は反対グループに向けて包茎手術推進反対PR漫画を描いてみせるところ。それがまったく同じ絵で、台詞だけ変えたもの。なのに、まったく違和感がない。これを読んだ時、私は二十歳くらいだったんだけど衝撃でした。これ戦争漫画と同じなんです。茶化してあるけど、風刺漫画でよく言われたこ

と同じ。近藤日出造（*9）という有名な人がいるけど、戦前に戦争協力を描いて、戦後にがらっと立場を変えて、漫画界の長老になった人。アメリカ批判の漫画をちよこつと変えるだけで、政権批判とか正反対の立場に使うことができる。このPR漫画は下品な例だから使いにくいんだけど、風刺漫画の本質を突いていて、いつかこういうことを研究したいなと思ったのがきつかけだったのかもしれない。

◆今の風刺漫画の残念なのは、政治的なことを話題にしたりお笑いにする文化が発達しなかったから。

吉田 日本の新聞をパラパラ見ていると風刺画が載せられています。あまり興味を惹かれないというか。じゃあ

海外の風刺画はどうか、風刺漫画の扱われ方は国によってどう違ってくるものなのかなと思います。

橋本 元々、新聞の風刺漫画って看板の漫画家が描いていた。イギリスだと一九二〇年代ぐらいに大体そういう看板漫画家の仕組みができて、それぞれの雑誌の政治的な立場に合わせて、分りやすく政治問題を絵に描いたり茶化したりする専属漫画家が多かった。わかりやすい社説みたいなコメントを書くコラムニストに近いかもしれないですね。

吉田 一人の記者っていう感じですね。橋本 そう、他の人にはない、機知に富んだ方法で時事問題とか日常生活を風刺する、という位置付けだったんですよね。いまの日本の新聞の風刺漫画だと、確かに専属の人はいるんですけ

ど、公正中立っていう考え方があるせいでと思うんですが、図式的なところに落としこむばかり。だからあんまり面白くない。図式が決まってて意外性や毒がないし、こういう見方があるんだ、というような新鮮さもない。明治大正にはそれなりであって、『パンチ』みたいな風刺漫画専門の雑誌もあったんだけど、それがすっかりなくなつたのが今の風刺漫画の残念なところ。多分、政治的なことを話題にしたり、それをお笑いにする文化が発達しなかったっていうのも大きいんでしょうね。

吉田 そうですね。ウーマンラッシュアワーは話題になりましたけど、そのくらいしか見たことがないです。橋本 そうそう、ウーマンラッシュアワーぐらい。英語圏では結構多くて普

通にある。一九七〇年代、私の子供の頃ぐらいはまだ日本にもあった。

齋藤 例えばこういったものがありましたか？

橋本 田中角栄とかみんな真似してたよ。

一同 あー。(笑い)

橋本 タモリとかが過激で、「まあこのー」とか言ってみんな真似したの。大平正芳首相(*10)の「あー、うー」なんて口癖もそう。一九八〇年ごろに描かれた手塚治虫の『マコとルミとチイ』にも、そんな一コマがあって、実際、ああいうおふぎけは多かった(図14)。政治家を茶化すっていうのは結構あったんですよ。今からうじてNHKの「ライフ」っていう番組に「宇宙人総理」があるけど、あれがほぼ唯一で。私は地上波であれ以外見たことがない。

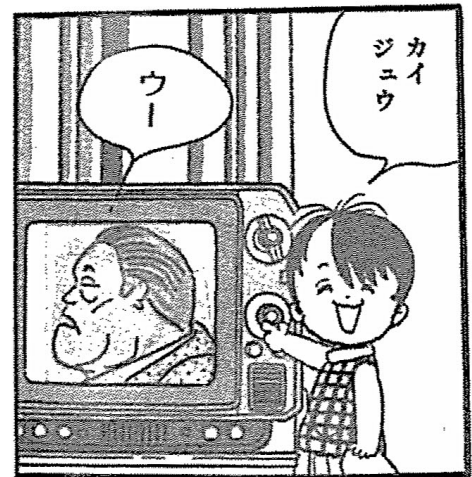


図 14

政治について語ることはハードルが高いでしょ。意識高いとかアツいんだねとか言われちゃったりするから。だからそういうことはしようがないっていう感じでクールを装うことが多いんじゃないか。特に皆さんの世代だと、場を悪くするっていうか、波風立たせるというか。だからそういうのを笑いにするということ自体、ここ十年全然ないんじゃないですか。

◆再掲載にうるさかった『パンチ』は結局、時代遅れになった。

金子 私の想像する風刺漫画は個人の特徴とかを強調するものなのですが、『パンチ』に掲載されている絵は普通に写実的なものが多いなと思って。それは、わかりやすさを追求していたらそうなったということなんですか？

橋本 『パンチ』は、写実的な絵を描く作家がすごく多かったんです。そもそも『パンチ』に寄稿していたのは漫画家としてよりも画家になりたかった人が多い。だからアカデミー絵画コンプレックスみたいなのがあって、女性を古典絵画のプロポーションで写実的に描く人が多い。写真をトレースする人も多かったし。皆さんが一番よく知っているものだと、『不思議の国のアリス』



図 15

の挿絵を描いたジョン・テニエルが、『パンチ』の常連漫画家。あの女王様の絵とか誇張してるけど、リアルに精緻に何本も線を描き込んでいく。それだけに『パンチ』は使用料が高くて、再掲載にうるさかったんですね。だか

ら *Review of reviews* に『パンチ』はほとんど載っていない。他の新聞や雑誌だと、どちらかというとメッセージのほうが重要だから、再掲載にそんなうるさくなかった。それで結局、『パンチ』は時代遅れな絵になっていく。今の日本の風刺漫画みたいに、さらさらっと少ない線で輪郭を中心に描く書き方は、一九二〇、三〇年代くらいに世界中で定着したんですね。デイヴィッド・ロウ(*11)っていう漫画家がイギリスにいて、その人が政治漫画のお手本として広まって、今の新聞漫画の原型になっている(図15)。

◆戦前の町内日常漫画と今の四コマほのぼの漫画は不気味なほどそっくり。

齋藤 新聞の政治欄にある風刺漫画の一コマ漫画と別に四コマがあるじゃないですか。そもそも普通の漫画といわゆる風刺漫画の違いってどういうものなんでしょう。僕は長谷川町子の『サザエさん』とか『いじわるばあさん』が好きなんです……。

橋本 『いじわるばあさん』は面白いよね。家族幻想がなくなった今は、『サザエさん』より『いじわるばあさん』こそ読まれるべきだね。独居老人の意地悪さと孤独が本当によく描かれてる。齋藤 でも結構ひどいのはありますよ。橋本 うん、笑えないくらいひどいものもある。でも今見ると、ああいう暴走老人が現実になっちゃった。長谷川町子の地は『いじわるばあさん』に出てると思うんですね。

齋藤 風刺漫画っぽい要素も時々入っ

ているじゃないですか。

橋本 そうね、いじわるばあさんが、敬老の日いろいろなイベントに出て、しよせんは若い者の自己満足さ、って一人でつぶやくところとか。子どものときに見て今でも覚えているのは、酒とか飲まずに規則正しい生活を何十年もしてきたっていう老人を、お爺ちゃんお婆ちゃんの会で紹介してて、みんなが秘訣を聞きたがると、オチはずっと刑務所にいたからっていう。だけど今の新聞の四コマ漫画は面白くないでしよ。

齋藤 面白くないですよね。

橋本 炎上するのが怖いからだろうね。こんなのが出てましたよってツイッターにあがって作者は何を考えているのか？ となるのを一番恐れているんだと思う。

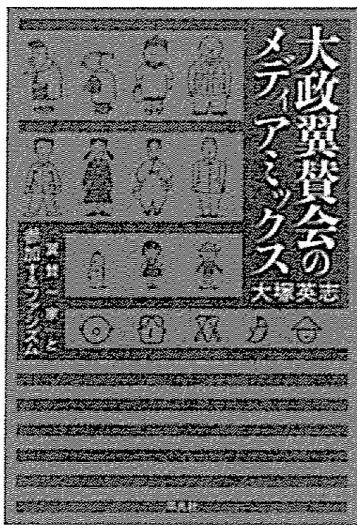


図 16

齋藤 前までは四コマ漫画は普通の漫画だけど風刺も扱うというくらいで、風刺漫画とまでは言えないですね。

橋本 四コマ漫画はけっこう社会への異議申し立てとか多かったんだけど、最近では、家庭漫画一色。でもそれはそれで、お上には文句をいわずに、家庭や町内でなんとかするっている戦時中のプロパガンダと似てるんだよね。このあたり大塚英志という研究者が『大政翼賛会のメデイアミックス』という、すごく面白い本を書いている(図16)。

それによれば『翼賛一家』っていう漫画があっただんですよ。

齋藤 『翼賛一家』？

橋本 そう、みんなで大政翼賛するぞっていう一家の漫画があっただんです。お父さんがいてお母さんがいて子供がいて、町内がみんな仲良くて。もうピョンと来るでしよ。『サザエさん』とそっくり。しかもこれコピーライトフリーなの。そのキャラクターを使って好きに描いていいよっていう漫画。宮尾しげを(*12)が一九六七年に出した『日本の戯画』をみると、一九三〇年代に『スピード太郎』という日本最初のストリー漫画を描いたといわれる穴戸左行が描いているくらい(図17)。ほかにもいろんな漫画家がそれをネタに描いていて、それがレコードやラジオ

ドラマになって、日本最初のメディアミックスになったらしい。『大政翼賛会のメディアミックス』によれば、その延長に出てきたのが『サザエさん』というわけ。たしかに『翼賛一家』と『サザエさん』は相互に監視する『隣組』（*13）とおなじ。あんな仲いい近所、今あったら面倒くさいでしょ。



図 17

もちろん今と完全に繋がってる訳じゃないけど、戦前のそういう政治に口を出さない町内日常漫画と、今の四コマのほのぼの漫画って不気味なほどそっくり。

齋藤 完全に線引きできる訳でもないんですね。

橋本 そう、完全に線引きできない。

昔は漫画は、手塚治虫が戦後に始めたっていうふうに、戦争で区切ってたけど、今の研究じゃ否定されてるでしょ。手塚治虫的なストーリー漫画は戦前にもあったし、手塚治虫も戦前的な漫画をすごく引きずってるし、かなりそこには連続性がある。もちろんストーリー漫画は四コマ漫画や風刺漫画よりも、カートゥーンという形で一九二〇年代ぐらいにアメリカとかで発展するんです。皆さんどこかで聞いたことがある

と思うんですけど、*Bringing Up Father*（*14）とか『タンタンの冒険』（*15）とかがあったりする。要はそういう続き物漫画が出て。似たようなものが戦前からあったんですよ。基本的にコマ割りはすごく単調なんですけど、それを動かしたのがデイズニーのアニメーションですね。

◆過剰な暴力性で弱者をつるし上げる怖さと、不満のガスを抜くだけで現状を肯定してしまう弱さ。

吉田 風刺画の弱点は何か考えた時、時間の流れやプロセスを一コマとか四コマっていう短さだけでは描き切れないところがあるかもしれないと思いますが、風刺画の短所についてどう思いますか。

橋本　そうですね、風刺画の短所は、大雑把に言って弱者を差別するところと、ガス抜きにしかならなくて現状肯定になってしまふところと、二つあります。これはヨーロッパの風刺画の起源が、イギリスとフランスにあるところと関係があるんです。

フランスの場合は、フランス革命がきっかけだったんです。フランス革命前夜、マリー・アントワネットを、今で言うネガティブキャンペーンみたいな形で描くのがすごく流行ったんですよ。リン・ハントというアメリカの有名な研究者が『ポルノグラフィの発明』という、日本でも翻訳のある論文集で詳しく指摘したんですね(図18)。そもそもポルノグラフィというのは非常に政治的なわけです。女性であろうが、男性であろうがLGBTQであろうが、

ある種のシチュエーションに欲情するのはおんなじ。それも政治的なものや支配関係の逆転の物語に多いですね。現にどのような人たちがどのような人たちにどう欲望して、それをどこまで認めるのかというのは非常に政治的でしょ。ある種のはすごく許される。異性愛はすごく推奨されて、結婚に至るもしくは性的な交渉に至る物語を私たちは膨大に生み出している。でもある種の性的な傾向を持つ人達についての物語はほとんど作られないし、



図 18

むしろタブーとされている。私たちが当たり前と思ってるものに意義を申し立てたり、そういう価値観を転倒させるという点でポルノグラフィは非常に風刺画的な、強い価値の転倒を引き起こすことがありますね。マリー・アントワネットもいい例で、多情な女がのさばりやがって、という反感にぴったりはまったんです。革命を煽る際に、アントワネットを標的にするといった感じで炎上した。大事の前で弱者に焦点を当てて、風刺画で誇張することで良くも悪くも大きな運動が生まれてしまう。

一方、同じ十八世紀のイギリスでは、フランスをバカにしたり、イギリスの国王をこっぴどく風刺する政治漫画が流行した。ナポレオンと地球を分割している政治家のピットを描いた風刺画



図 19

や(図19)、でっぷり太って酒色におぼれるばかりの皇太子時代のジョージ四世を描いた風刺画はどこかで見たことがあるかもしれません(図20)。どれも十八世紀末から十九世紀にかけて活躍したジェイムズ・ギルレイ(*16)の代表作です。議会が強くなって国王の力が骨抜きになっていったから、これだけ国王を風刺しても革命を起こす



図 20

ほどのことは必要ない。あくまでこれってあれだよねと言ってあざ笑う。言いかえれば、風刺される対象が権威として揺るがないから、それを誇張して批判すると笑いの対象になるわけ。だからこの手のイギリスの風刺画は基本的に現状肯定。笑い者にすることで解決した気になってしまう。こうした風刺漫画の二つの起源が、そのまま風刺漫画の短所にもなっている

るような気がします。過剰な暴力性でもって弱者をつるし上げる怖さと、不満のガスを抜くだけで現状を肯定してしまう弱さ。これは今の風刺画やプロパガンダの持つ問題へとほぼそのまま継承されていますね。

◆問題自体ではなくそれについて書かれたものを話し合う方が面白くなってきてしまった。

齋藤 風刺画は作者の意図に反して読まれることもあると思うんですね。*Review of reviews* は中間層を相手にしている訳で、読者層が幅広いことによって読まれ方に違いはあったのでしょうか？

橋本 それはあったと思いますが、今のようないやうな論争や抗議はあ

んまりなかったようです。一九三〇年代ぐらいから読者投稿漫画が盛んになるんです。日本も一緒なんですけど、自分で書いて投稿して採用されると薄謝進呈、というのが盛んになる。それだけ漫画が人気になって書く人も増えてきたから。そんな風に描く機会や発表の場が増えて、相手の風刺漫画を批判するだけじゃなくて、それぞれ自分の立場で風刺漫画を描いて反撃するとか、そんな論戦が多かったような気がします。

齋藤 新聞では同じ情報を共有して、ツイッターも同じプラットフォームではありますが、人によってパーソナライズされた情報だけを受け取るから、同じプラットフォームでも性質が違うと思います。それで、バンクシーの医療従事者の作品は素直に医療従事者を

褒め称えて応援しているように読む人もいれば、結局は他の今まで遊んだヒーローと同じ様にゴミ箱に入れるから結局はそういう風に扱われるよっていう風に読む人もいる。そうやって読む方が分かれることをバンクシーは狙っていたかもしれないし、別に狙っていなかったかもしれないですけど。そういうことを新聞であればみんな同じように記事として見て、その意味を語り合えたかもしれないけど、ツイッターだと語り合えるのかなとか、そういう違いがあると思います。先生はバンクシーの医療従事者の作品についてどう思いましたか？

橋本 あのバンクシーの医療従事者の作品はよくできていて、とても両義的ですよね。医療従事者はヒーローだ、いや正義の味方のように何かを壊すの

じゃなくて、傷ついた人を癒すから、これまでもとはまったく違うヒーローだというような価値観の転換を示している。その一方で、この子も、いつかは飽きて、この新しい人形を古い人形と同じように放り投げるともとれる。所詮は流行りもののキャラクターとして消費しているだけで、消費する構造は変わらないんじゃないかという、もう一つの見方も可能。ある種の文学作品とよく似ていて、力強いのにどっちとも取れる曖昧なところが残されている。現代的だなと思うのは、あのバンクシーの絵から医療現場を改善しているという動きはあまり出てこなくて、むしろその絵や行動の解釈の方にみんなが夢中になってるところ。今の新聞やテレビと似てて、それ自体の内容よりも新聞とかをネタにして語り合うほ

うが楽しい。

齋藤 風刺画が生まれた頃と同じですね。

橋本 そういう点ではむしろ先祖返りしたとさえいえるかもしれない。みんなワイワイするためのネタだけのために消費されてる。それこそ人形をとつかえひっかえして遊んでるバンクシーの絵の子どもと一緒に。あれが医療従事者をリスペクトしてるかどうかを議論している限り、医療従事者はずっとあのままですよ。議論ばかり楽しんで、現状がそのままというのは、いわば風刺画の伝統にたっている。せつかく現状を見直す視点を提供してくれているのに。

齋藤 起源の話で言われていたイギリス型ですか。

橋本 そうそう。じゃあ実際に待遇や

状況をどういう風に変えていくのかというのは、たしかに別の話だけど。ただ、それについて話し合うことの方ばかり面白くなってきたというのは、大きな変化でしょうね。事件そのものを深く論じるよりもその事件について書かれたものを、どっちが正しいか正しくないかについて話してみたいな。医療従事者のことを話すよりバンクシーのあの絵を話す方が楽しいし楽でしょう。医療従事者をどうするのか本当は話さなきゃいけないのに。意地悪な言い方をすれば、あの作品を見ているとそういう面倒くさいことを話さなくて済むわけです。実際、医療従事者の待遇をどういう風に改善していけばいいのかという話は、面倒でしょう。待遇や予算、ボランティアを含めたシフトとか、部外者がツイッターでやっても

盛り上がらないでしょ。でもあのバンクシーの話題があると、そういう面倒なことを考えずに、でも社会のことを考えているような高揚感をもって、多分一週間ぐらい楽しく議論しながら生きられる。

一同 そうですね。(笑い)

橋本 そういう点で、風刺画の現状肯定の弱さがよく出てるかもしれない。シャルリーエブド事件も同じ。問題自体よりあの事件について話すほうが、はるかにそのことについて論じるより盛り上がる。イスラムをどういう風に考えるかって言ったら予備知識もないし地雷がたくさんあるしですごく大変でも、事件だけだったらみんなで盛り上がる。風刺画とかああいうジャーナリズムは、ツイッターとかSNSが盛んになった以上、そういう場に受け

る分かりやすいネタや敵を作ることじやなくて、弱者を標的にすることなく、この次にどうしたらいいのか、そういうことをじっくりと取り上げるべきだと思ふんですね。でも結局、ネタと敵を見つけることばかりやってる。

齋藤 そうですね、世論は喚起できていけるけれど。

橋本 非常に残酷な話だけど、世論の喚起ってツイッターのトレンドと似てて、それだけじゃ相手任せでほとんど意味がない。そのあとが大事なんだけど、行政を動かすのってすごい面倒くさくて、一般人にはふつう、何もできない。

齋藤 中間層は中間層で変わらないというんですか？

橋本 もちろん、どういう人を政治家として選ぶかというのがあつて、自分

の選挙区の議員に働きかけるといふ方法はあります。でも、そういう地味ながら肝心なことはあまり議論されないですよ。結局、その時その時に、ツイッターで炎上させるようなことを言う人や、私たちがいいねと思えるようなことを言う人ばかりにすぐ話題が移つて注目が集まつてしまふ。これじゃポピュリズムって言われるでしょうね。地道なことをこつこつとやる人をどれだけきちんと評価して、それを問題化するなり、問題を覆い隠さず議論して考えるか。それが本来は新聞雑誌とかテレビがすることなんですよ。今ツイッターとかのネタを提供することばかりでしょ。投稿によれば、こんなことをしてる人がいました、ひどいやつですね、みたいな。

齋藤 消費する娯楽化を進めるってこ

とですね。

橋本 そうですね、そういうのを私たち自身が望んじゃつてから、マスクミばかりを批判してもしょうがないし。そんな風にマスクミをSNSのネタとしてしか、みないようになつちゃつてるし。

齋藤 そういう態度が現代的ですよ。

橋本 正直、百年前の風刺画なんて一つ一つ見てもつまらないんだけど、五十年まとめてみると、いろいろな面白い問題が見えてくるし、現代に対する見方もずいぶん変わってくる。いまここからちょっと離れて、古い資料をずーっと見てると、それこそ風刺漫画のような視点で現代を眺めるところがあつて、意外なつながりや奇妙な相違点が見えてくるのかもしれない。

(二〇二〇年八月三十一日収録)

聞き手…齋藤雅泰(外国語学部中国語専攻三年)、吉田唯(文学部比較文学専修三年)、金子明日香(外国語学部ヒンディー語専攻二年)、鷹取令(文学部英米文学英語学専修二年)

脚注

- *1 *Reader's Digest* アメリカの総合月刊誌。一九九二年に創刊された一般大衆向け雑誌。新刊書や雑誌記事の要約、オリジナルの記事から成る。
- *2 『太陽』 総合雑誌。一八九五年創刊、一九二八年廃刊。博文館発行。高山樗牛・大町桂月・上田敏らの論説・文芸時評・人物評論・小説などを掲載。
- *3 『新公論』 明治後期から大正期にかけての月刊総合雑誌。一九〇四年二月創刊、一九二一年九月までが確認

されている。新公論社発行。「月刊の百科全書」と称して内外の新聞雑誌の論説を転載した「万報一覽」欄が売物となった。

*4 *The Strand Magazine* 一八五一年イギリスで創刊された一般向け雑誌。コナン・ドイルが寄稿していたことで知られる。一九五〇年に廃刊。

*5 *Punch*(『パンチ』) 一八四一年に創刊されたイギリスの週間風刺漫画雑誌。

*6 レニ・リーフェンシュタール *Leni Riefenstahl* [1902~2003] ドイツの女性映画監督・写真家。ナチス政権期に活躍、ベルリンオリンピックの記録映画『オリンピア』、ナチスの党大会を撮った『意志の勝利』で世界的な名声を得る。第二次大戦後はナチス宣伝の罪で投獄されるが無罪となった。の

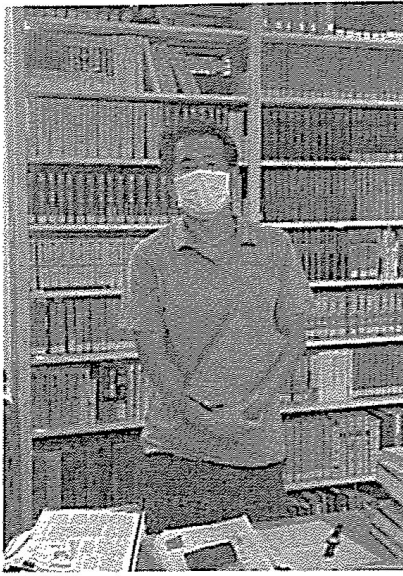
ちに写真家として活動、アフリカの Sudan 奥地にすむ部族ヌバの写真集を発表したことで知られる。

*7 『ハワイ・マレー沖海戦』 一九四二年公開。山本嘉次郎監督。特殊技術監督として円谷英二が参加。出演、伊藤薫、大河内伝次郎、原節子ほか。海軍省の後援により制作された国策映画。

*8 古関裕而(こせき・ゆうじ) [1909~1989] 作曲家。歌謡曲・放送音楽などの作曲で活躍した。作品に「船頭可愛や」「長崎の鐘」など。

*9 近藤日出造(こんどう・ひでぞう) [1908~1979] 漫画家。岡本一平に師事したのち、読売新聞社において政治風刺漫画を多数執筆した。後進の指導に尽力。

*10 大平正芳(おおひら・まさよし)



橋本 順光（はしもと・よりみつ）

大阪大学大学院文学研究科教授。1970年生まれ。京都府出身。1904年大阪大学文学部卒業。2001年東京大学総合文化研究科地域文化研究博士課程中退、2001年横浜国立大学教育人間科学部専任講師、2004年同大助教授。2008年3月ランカスター大学Ph.D.（歴史学）取得。

〔1910～1980〕政治家。外相・蔵相などを経て、一九七八年首相。二年後不信任案可決で衆議院を解散、総選挙中に死去。

* 11 デヴィッド・ロウ 一九二〇年代の世界的人気漫画家。現代の政治漫画の原型を作った。

* 12 宮尾しげを 〔1902～1982〕漫画家、江戸風俗研究家。岡本一平に師事。大正十一年「東京毎夕新聞」に子供向け物語漫画「漫画太郎」を連載し

てデビュー。代表作は「団子串助漫遊記」。江戸の庶民文化を研究し、「文楽人形」「江戸小咄集」などの著作がある。

* 13 『隣組』 昭和前期の日本の流行歌。作詞岡本一平、作曲飯田信夫。隣組制度を啓蒙する内容。一九四〇年から放送。

* 14 *Bringing Up Father* 漫画家のジョージ・マクマナスによって作られたアメコミ。一九一三年から二〇〇〇年までの八七年間にわたって放送され

た。

* 15 『タンタンの冒険』 ベルギーの漫画家セルジェ（1907～83）が一九二九年に生み出した冒険漫画シリーズ。

* 16 ジェイムズ・ギルレイ James Gillray〔1757～1815〕イギリスの漫画家。刻字、印画術に従事した後、政治風刺漫画の才能を発揮した。ジョージ三世をはじめ王族、ナポレオン一世、小ピットなど当時の知名人および社会の風習を風刺した。